夢想兵衛胡蝶物語後篇

壹

へ13
3658
6

へ13
3658
6

此ものがたり書崩の紙ぶくろに
はいりて
はるかに
ひらけて

再編胡蝶物語序

千葉県
渡辺書庫

優雅の稗史戯盡てよりこのかた八九年。僅ならずして
のち独り傳ふ。漸く移びいよ〳〵世の人
所為よりまさりなぐら。生活の二字を覇まく業
よりあるよりなる兒男子一疋まは是を行ども。
五尺の軀で安坐と日〳〵し坊みむひつ蓋好ら〳〵も
里つゝ見うけたるつ幸なるべや。されば紫の戸を
立てる。書賈も今は寡うねば書つ閑と長書侶

の智嚢を絞り出して防ぎたりけれども吉軍の暮るるまで
と氣弱くなる。朋輩物侍と著しるる蔭が来るから
扨元の白さくつぐ喜めて今茲も正月のたぐえんら。
後編の催促に打て耳よ入るるの。一ヶ日脱のなりけ
月和花曇より五月雨の。陣を悔ぐぞ武作墨の曲り形
みもこぐ濡け拭べ。盃前もたや遠うべ。蓬ゆべ生ぬ蓬
本と客よ勉て筆式起て。再編四冊を綴ま。前後
九巻の冊子とのつ信や河豚を喰むりの。美味を
賞して中る紙ぐつぐ又稗説を編りの。嘗をとりて。
苦を厭つぐ河豚を中ふ。味のある者。於味のあるの
扨元の耳垂味ひのるるべ。ちぐば此書紙於味と
命る河豚のたるの孫。あるも実も毒ある。茱も
ふらいぐ世の親。晋よ居膳。て梅屋が加る花毒
も梅末師ら鑄ふ鯛の月も。宮ふが為の形扨三味。
ひ戸る独づて耳ら。事屋の独口を左ゆ妻て。
ふこの編よ。自序すぐて。
文化七年庚午夏日

曲亭馬琴

食言郷産物之図

いろろ蛇

けいせいの丈
からのぞーうそのうとさすいぞんぜ
こうとけーさせるを
ぞんもをよめくん

ちょぐはあんどえろはみー

九万蜂

なつい琴

口秤

とのかざりハ
きりぐあを
ぎこをまるいさの
かろうようん
えとなのいこハ
もろう

ちのえかりふめハろ
ちぐろんまちぐふべー

虚月爺二郎 年古を
ゆて 灰吹らう大蛇を
いどる 如

煩悩郷産物之図

大不鷺

ちと
さろろても
るきぐー
そうみ
ちえ

夫婦井竟の牓

小
ふぬいさのぞ
えんそうえの木のそとろ
ぐ
えんの
木の
トュ
あろ

ブリく小五塔

ぐぐーぐーろ

恋の病犬

えひのまま
ぬ

きくるあんさくるあろん
あろんろんくとろく

膝共檀香

ひざともだんかう

ひざとひとろ

●きろさんなろくん

物思ひの君胸小

けりをなーてどうせう蚊
かうせう蚊とゝ蚊を
おくんとろる如

有難

哀傷郷産物之圖

血の南彌陀

後世のいと浪

四鳥の輪鐵

かけ一屋の
うつゝ
あまざの雨よ
袖と
ぬらさ知

歡樂郷土産圖

あでさう弁

十人が十人
きらひとも
ものの人

大可

ひだるさ

子孫ぞん続

たのしい菜

ちのこさ
かぐのこの
のぞき

ちのこの
なさらひ

人のたのしみ
さまざまある如

再編胡蝶物語總目録

第一　食言郷
夢想兵衛虚月爺二郎と議論のこと
第二　煩惱郷
耳目の慾心乃憂小勝ざれこと
第三　哀傷郷
夢想兵衛湖畔の雨やどりこと
第四　歡樂郷
人間も歡樂無數量のこと

毎巻小批評あり　目録畢

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之一

東都　曲亭馬琴戯編

食言郷

食言とハ何ぞ云ハ今日是とのたまへども明日輒変易せり食らひし物を已に吐く復これを呑ばこそ成湯の誓文ハ朕食言せじとの〻たまへ夫食言とハ偽なり食言則欺詐盡て小雅てふ書をよんでもまれ〻ハ犢鼻を引締て萬事ハ虚と宰〻ざる人と渠奴ハ食へぬ奴といふ人と雖も食ふが為そのいつくしみも取べきあり道家の虚説ハ不老不死浮屠の虚説ハ天堂地獄莊子の寓言孫子の武略ハ皆世の為人の為と合ってこれ〻ハ偽の文字ハ實結ハれ〻ども淺ましなるハ凡夫の欺詐尻も結ぬ芋環のいとしく可愛ハ女郎の反ハ客わど欺詐を尽ねとハ俳諧者流の滑誓可

めけから正直正路にあらねど。さてもそのち夢想兵衛は貪婪国の大圓小。福の神の冥助によつて。種ある小世紙老鵄にのりつれて。ふたゝび空中へ閃き登りしが。此紙鳶もまためふ一旦てあるが意に随ふと。蘇武が雁でも。林逋が鶴でも。なかなく追ひ付くをおもあらば。小便などたれてありて。下界へちりちりと思ふときハ紙老鵄下りとどまりて。檀那どの要を去せまして登らんと思へバその随ひてくと天へ升それ。おぐりさがりまもなき時の相場といひわがら。その自由自在なること。二百ヶ一の罾も。跣足で逃まし。列子が風も羨しからず。淮南が丹飲さくもなしれふといひけれ。仙人の楽を知ねなりれ。奇妙くとひろはじて。紙鳶の背へ大胡坐。髯按倦て呑む煙草も。咽えるまでバあつき身を忘れ。甚麼鳶公これまでハあまり理屈で堅きやつぱりとつさりと気をかえて耳近い国へあるまいかと見てゐる所。見えるそ。ちろししてありけれ。よのとまれと通し。橋にてうち休し。昼食かねの旅客が。小休息なやうな

口状。一件理論がこの本の作者の趣向であるかの紙鳶無理なりとも檀那どの。とそうでもさうぢやねへものの。紙鳶は非情の造物なれど其処までハ知らねども。駅まで彼此と。ずらりとおりてここぞ名にし大きな浮誕をうそぶく食言郷へぞおろしける。気味よそでかこめさ国ぞうも。からからいひなりめて出放基町に名も高く。虚円希次郎と鳴きたる野鉄炮の師範する。浪人どの表借屋基野万八といふ旅店に宿りて。つらつらこの地の形勢をみるに利慾の為に恥を志らぬ偽をかて世の人を欺べきものぞ。世事といひ或ハこれを愛想といふ世るハ浮語の別号にて歌作ハ論議の楽屋なれバ人の女房をおしなべて御新造様とよび。あせども蔭でハ小指の。かつあのと誉る跡から。しいひ坊さんおいでお娘さん。よくお髪ができましたと目前の叮嚀態も。ご縁の中ハ彼餓鬼と。女僕めがつらまく因り果ると思ふてあれど色に出さず。来る何日其所其首へ。以

お供を祝ぐひまなし。拙者がよりお誘引まうそ。と立派に約束しておいて本日
になれば音もせず日経て逢へばすらくと。彼日は何か故障ござつて火急の
要事にとり紛れ。近年の此不約束と萬の欺詐なく闇をあゆまれば。おのが
奸智に引きくて人を疑ふを専ら習が性となるものなれば。子を教るとても
此国ふへとなりあるよひの金剛寡てちよこく走り忽地に跌き輾ぶ稚児
が。その傍らに泣出せば母親遽て走り出坊は強いぞ。金を拾つた泣なくと
抱き起せ。すぐく金を拾ひもせぬに金を拾つたといふ親の欺詐をまなびつゝ
承知して泣止む三才児の魂百まで金といふ字に痛さを忍ぶもとなる。これ親
の教による。泰平の世は夜戸を鎖ど。途に遺金拾ふぞとは。堯舜以来乃
通り文句貧しても心清くは。いかで遺金を拾ふべき。金を拾へば大きなる厄災送するさ
あるいは縁なき者ではそれぐの国法あり。拾ふて人に由告ずもせど。おのが懐抱へ納

まば忽地天の咎を蒙る。送しこれのる念ひでも。始終其金が身に著べきや。
金を拾ふは禍を拾ふに等しと恐るべき小金を拾へと教る親の。欺詐はその子を
捨るに似たり。とまづこれらに及ぶ兵衛が氣にはさらく容ねども福の神の
教を守りて面ありふはいひも懲らさずく苦々しげに二三足とん捨て又先の町へ
来て見れば稚児携る夫婦を山母親が背負り。附紐しておかすれば爹々は
向ふへ走り抜け。こゝまでござれ。醴あんぜよと囃しながら手を叩けば稚児は
真実に醴を飲まんと幼き足で走りよれば又六間引退き。醴あんぜよ
と手をたゝけども醴を飲せぬゆゑにおれが来てめそめそなきべそかう
尻餅撞出て破癪泣しそてられ。母親あいて引抱へ胸をひろげてさあ飲めと
矢庭に乳首をほうむられ。忽地に泣止ども。そでものまれずめからふ乳汁を
飲そといふさらば飲せぬ醴で導くより。親の信といふべけれ。乳汁は毎日飲

韓非子巻十一曰。曾子之妻之市。其子隨之而泣。其母曰。女還。顧反為女殺彘。適市來。曾子欲捕彘殺之。妻止之曰。特與嬰兒戲耳。曾子曰。嬰兒非與戲也。嬰兒非有知也。待父母而學者也。聽父母之教。今子欺之。是教子欺也。父欺子。子而不信其母。非以成教也。遂烹彘也。右の條

すら親のゆへてめづらしからねバ醴と欺くものこそ子ハあらけど。その僞ハ利欲とめて稚きものゝ道すぐからぬ大きくなるに隨て親の欺詐をみならひ必押れ。親を詐さし何ともおもハずなりゆめハ親が子を詐し後ハその子に親が詐され。あし犯だびの志あらりして本錢の財布抜くあり。身上の大黒柱へ大きな竅をあけられてやうやく夢の覺るもの持所詮親の手に終ぬ孩バ勘當と云按を定め。初度ハ長屋へ世話を被親が招ぐ長口状。憎奴といふハ僞り。信ハ可愛い子を捨る。浮世の藪の薮医者ハいふもさらなり扁鵲でも。匙を投ぐる身の腐爛ハ切まども斷えぬ凡夫心。かくても曉らぬものゝ多し。むかし曾子の内義が市へゆくに。その子跡追ふて泣しかバ母只今を賺していふやう。おん身大人しく留守してゐよ。彘を美く烹て食そといふ。曾子これを聞て彘を捕へ殺そうとせられしかバ。その母遽て推止め。あれや戯でござんすといへバ曾子ハ眼を掉。

そのかミ戯といふても。嬰児ハ実情におもふ也。稚きものハ何ごとも。親をみならハねバならぬに欺くを教んや。子を欺て信なくバ。何をもて教とせんと答て彘を烹させたりとなん。亦明の王稚夫といへるひとハ。三世その子を教るに。妄語つくを第一の誡とせられしといふ。食言卿の習俗なれバ。わづかな夫婦の中でも偽りかざるものなし。孟子に所謂妻妾に驕る良人宋子も又多かり。卯の花ぐもりいまし霽て。杜鵑の声も耳になるころ。隣家へ誂え込む浴衣地を。此方の女房ハ羨しくおもひ。檀那へ今茲ハ浴衣がほしうさせる。されども流行の麻乃紫鹿子を一度も被るんざと啀けバ。亭主ハ聞もあへず。髯を紀撚浴衣が欲くバいつでも好みのを被させん。去年拵へた縮緬の単物も。俺ハあまり倦さすら。その子の襁褓にするがよし。呉服屋からとりよせてみてハろくなるハ持て来ぬ。望翌去日のうち嫂を穿出し。好な浴衣を見立てもらふと。當もないのに見栄を

あまさけ
ちんぜうと
いへと
とさるる子を
めるうせる
人
子のころんざを
ぬく金を
ひろうこと
いふておや

※石雞志巻六家訓稿餘の條下を併ゝるべし。ふハ値なの説をひく。のミ以下本文を奉ず

いへ。女房もぬらぬ顔。近屬母さんが来るのさつさと。名護屋へ幸便がある。有松絞を五六反跳て遣さ往よ。今茲ハ浴衣をとりやんな。といひなさつさ。彼らもどうも被らもまもとへ。おまへ彼綿縮よ。倦みさつさとの夏の洗ふよもやせう。といふうちゃ。さう出。赤りやひ空の変ぬうち。可惜袖を裁ふて。女りのふ進の向せが。亭主ハさろさ一張羅の。単物をきてやれ。口わゝ絆屋へたのんでも。染させる木綿ハ。さぶ浴衣をえて来よう。と出うけさ。ホが室懐。何を買まいと好なもべ。腰よ荷さる。残入をえて。廿四文が乾菓子をそのへ。袋を捨く。鼻紙へくるゝと押畳。汗水ゑんて立出もべ。女房もさうそとさど。りやと出まちせられて。おまへ浴衣ハぞうまるさう。聖りさせる者出へ。と。問ハ莞尓とうち笑ふて。さんがまづ。ゆつせ。ふ半月の間費しそ。百反あまりの浴衣地を。ふもどもく不立氣力の果ても果て立へとえれべ菓子を出さ

やう。酒を出さまう。又この秋老で日をくらし。俗衣ハ買ぞよ。ねつさぶ。そろさハ。るまい去年迫ハ大枚の呉服物を絶ぞ現金よ買さ花主ゆゑ。何を買ても買ハ。でも。何日も秋老をしてゆ。といひつ途で買て来さ乾菓子を何人と投出ぶ。女房ハぢろりとんて呉服屋で出さ菓子ハ版で押さまうゑ安りの。あるへいろ煉羊肝ゑぶ。些ハ含る来もあるとこのつも員ぞよ美栄といふ。ぢらいつりの鮮魚賣。拂ひがるんと多くども。まんざら素通りもなるまいと。索簾を推あげて。小さろのぞざろまへ。ふハいりでとさ。覗べ。亭主ちつくふんかりて。鳴手遣ろ。同今松魚を二本買さよ。聖又ぞ。買てやらふ。といふよ鮮魚屋苦笑ひ。今茲ハ河岸で松魚といつてハやぶ一本も入らけませぬ。うんざとをちつしやるとハいはせもの。ぞ膝立ろの母。今時の初松魚ぞろみさ。元の貝よ入っぬのと。只一口よりこもるのさざく入え透く欺詐とハ吉ど。腥りの如く悲しさハ耳を潰しく

老うの夫婦の間ぶよ吳栄をとゝバ。他人と祝ちよ工夫を凝らし。大晦日の帳面も勘定合て残ハ呂ぶねど。家よ疵る松飾よ人足五人の手間を厭ハず。夫婦ハ李秋の侵で居ても。仕呂せの絆天花ふ。家の鞆を染させて世間と飾り。子の清楽とも。ゐるさけ借ん按計あて。ゑ々機関の糸も切ま。術計盡て尻尾を見られ。残るハうその皮財布。ちまぐぬ口ハ憑ま。どりそうと降まゝバ脣怪よ。残ある人の子を見まバ。遠くかゝ雑しゝて。お娘さんハ愛敬ゐの色丁を黒けま目鼻ごちハ。お奴くさんよ生肖女子の痘瘢ハゐのふとなく。可笑しいゐのぶねとぎめふゝど。流石ハ老功。乳母ハ吹くゝも傍痛く落蜆ゐるバよけまども。枳椇ふく。ちやくあけと。鼻の穴ハ松だろう。くれそめて猪や今ひむとめ。ちつとそうとの拍系でハ婦よ娶人もあるようし。こんゐお子の乳母とると実よ肩身がすぶ生ると。苦くちい顔をまバ。そうや癩人の瘡うつを。山吹色へ刺印を打せそござる檀那どの。ゑ刺戸よあやうつて。玉面でも大ゐゐの。守袋へぶくさげる。迷子れのちうみゐのが。沢山ある。ら。喃娘さん。阿爺ぶ人形あげちせう。聖又お出と捨ばゐぬを。子供ハ正直生ようけて。それら顔をるゝびふ。ちよく人形ちくまでゐいゐ。ちんゐも紙巻と洗て。あげようふといつてち。弟ゝゝじねと。耳の縁へ鮪のゐる往復便されても。いけちやあちやあ。人形ハ生ずゝ。ちぐ吳衣が出ずませぬ。聖去月ハ大無言文此度りまちがつゝら。阿爺をちてらおさられるさゐと。謝さうゝよ又乳さ。當生ようれのでたゝめ口状。俄出へのゝえちゝビ。女子とゝまとバ論をかけて。あハせ猪の平一面。ちまゝ芝居がお好久。ぶうまゝてハいゝでゐれど。三階でも表でも。ゝとハ芝居が幅ぶゝ。いゝ何はでもお出るさん濱も食もいゝとぎやどざうませぬ。高土間でも鶏でも。近へ処でおゐるまひゃゝまとる

と欲ヒ。ゑびくいべうやよかろう。有一日朝うら三人連。あとが森窮へもゑ豆
ゆきう。あまり度々に深切よりよてござうまるゆゑ。厄介よるのうませうう。
どこぞぞ見せく下さうませ。といふ声聚耳くうんざうもれど。そうさぬ顔を
ゆづ洗ひ楊枝こそく歯を磨てゆづあるさへと坐敷へ請じ。何やら家くと
耳こそう。舌を出しころ笑つころ。尻をりぢくまる女中を。四ッぢん逗居箱
ゆせて。亭主ゆやくまろ口を出せろ口ゆくお出なれよゆふ扨のしく。杜若も三絯
も三朝も。三人ゆるゆら病気ゆ多。ころ代アでやとゆ口ゆ。勿論この帝の大八
突りけてい桟敷もなけまどそれいぢうともいてゆまるゆ。この三枝を口後ト
ぢへ。闇の夜とまろるゆ。月見よ行さゆるりの。いつそ形あるうゆ。ろへい
愛かく閑帳へも糸りなられてお後をあさも。三日の中吹乳しそ。お迎ひゆ
糸ゆ次といまて三人顔見あへせ。腹いそども流石ハ女子。ゆふ狂ゆ

せゆ。それハ実よ折がろうて。ゑと力が落ゆ。ゆ口是ゆで糸つくと其方
さへお構ひるのくハ。ゆ見せるのされて下さうませ。とゆりゆハ年倍ゆけそ
尾よろう呉涸乗。松茸八丈ゆろとゆふ葛の後ゑ根ゲ生て後る氣色の
あゆざれべ。楊枝挿る天窗を掻きゆりつゆもでハゆざうゆまれど。そゆも
なおふうけるのふ。肝腎の立りのゆ。出ぬをまろいつ連ゆまるハ何ゆり癖乃
欲と穿鑿。ゆあゆつくりとなされゆ。頃日出ゆくと新店よ。奇妙なゆ打
ゆゆざうゆゑめて蕎麥でもあげゆて。とろく家くゆも合掘うこせ。
口で孔子の妄語八百。貳朱ゆハ足らぬ二本棒。鼻毛ようまをてくゆ中ゆと
面色変ゆどせんうさなく。立ゆまるゆ立あゆふを。遠くく推ゆゆ。ゆうく
ゆてゆうきうよゆ只今おゆ〳〵ゆまゆて。可情蕎麥をかつ犯ゆうと。誰ゆゑんせよ
ゆうつゆ。ゆう来る若ゆなゆゆ逝い。といへバ女房も如才ゆるく。新店ゆれべゆが

まつ〳〵いで。延いのでござりゃせう。今見せよやうは。さよ。何をそなるとややら。
一処よ連て来まべいといひつゝ庖湯へ立てゆく。あつぐくてもやはり蕎麥ぐ。
一日中ゐてゆまべとて。持て来るうはは。そちこちとるうちに午亭午ごろ。
肚饑くゐるる腸ハ冷むど。三人一所よろ小便よ閑所借るぐうん見員ゐて。
胸のそゞ〳〵ー宮せとの紙入出〳〵て帰ゐるとこ二重紙子よあるねども。此二ハ
ふめる服帛帯。送り三重引残り。土産の俳菓子一重と損〳〵こうへで小ま
用物ら見てかゝるまゐさの河豚。汐よ喰く風情ゐて。供の老僕よ面目もなる
出〳〵さふる日和癖。降ぬうちふと立ゐる。疎ふ夫婦ハ目を合〳〵そんざりのぐ
ちけうんで。紅〳〵大きふうこせられさ。土間でゐても腮ぐるめ。三方金でハ追ひ
つゝぬおそ民ごと呟けば。女房ハ若〳〵しげふ女と見ると目がるのいらら。如才も
るゐてそんざめよゐ。ばいゐ。ちゐめハせご。と地洞を出〳〵るゐ。ゐれ。ら口状。

芝ぐるりの実情。さべとの国の習俗ゐて。箒とりて庭を掃き。お髭乃
塵とるとゐ。身の勢とするもゐふ。浮薄鉄面皮の徒とのこゐ人と誉雖。
ゐれハ漏ふりのゐふ孤ば。世るのぐなんとて数ゐも入もゞ。その見識の卑さと。
野雪隠の底のゞく。清合口状ゐてよゐ〳〵ねば。小便所の張れハ仰ゐられど
世才よ長ゐれば。金法るのどハんゞめゐふ。みるくいて承知させ。借てハ返ゐ
りのゐれど。欺詐を欲ぶ国風ゐれば互よ親〳〵班さる。約束要易を考とする
ゐ人。先日の返礼よ。ちまくの品を進上いさそ。それハ近ゐ忝いと礼をいハせて
その後ハ嗅気ゐもいひ出さば。堪ゐ孤て催促されがふうみともござりゐ。さまひ
んでゐれ〳〵さまば。出乾の帝ゐて進ぜ。と受けさ挨拶。ゐてもけりねど。芝
ゐも懲ゞ口ゐゐのゐん方へ足のむ〳〵ハ。亦芝一ッの不思議〳〵。夢想兵衛〳〵
ゐる毎よ。笑く毎ふ傍痛くいてのけられものをなれど。女子と小人ハ養ひ

がしとそよを洩して欺きぬ用ゐるより外はなべるの。今茲も暮て彩玉のそのそばめふるりしが。有一日虚月爺二郎が門へ紙牌を出して。明日欺詐のつゐをあいとひ浮藻執ゐの革へ仰ぐ所と写しれば。爰赤兵衛は果き果。這奴はこの國第一の口利と覚るふいるる欺詐を尽ゝ。ゆゑん時にそれ。ゆゑんなづこのめを説伏て食言郷を立地よ。老実國とのさんざと持病俄頃よ再蔑して。明るを逆とまろ径よ早見より支度して爺二郎が前門へふおえまひちうせば門へ漬して人新るの。今日他行と紙牌を出しうりこのそもりふと返しび果きて。ちくくとゆゆ。さてゆ爺ラが。ゆゑんの紙。ゆゑんも猜して霸ふおそれ空居をつふとおぞえうう。憎さも憐と。ひとりごして。背門口ろうさ覗けば。片扉を寄りけて。あはじ爺二郎ゆ室よ。ありゆればゲそとて遽しく。扉戸を開くれてとゝゝ入り。今日欺詐のつゐ初と

うけぬわり聽聞の為推糸しうるふ。前面ゆ他行と写して。漬しのゆゆゆゆる。かゝ其ゆ日本國の旅客ふ爰赤兵衛といふりのゝ。ゆりやるゆ去年より。臺野乃八が旅舘ふを出ど。ゝえて一句も欺詐つうゆゆ。りうゆ来べきとりやとて。ゆゆの集會をとそくゝと止ゆ出ゝるふゆゆゆゆゆ。抑ゆゆ神國の風俗ゆ。貴ゆ賤きゆゆのべて正直実義を貴とせり。彼三社の神詫るゆどゆふりのふゆ。欺詐つゝのゆ守りのゆゆゆゆとありゆ。されば管家のゆんゆゆゆゆ。ゆ行ゆゆ信の道よ。ゆゆのひるゆゆ祈ふゆゆとても。神や守らんと。ゆえのふ。ゆるふこの國人ゆ。漫ゆふゝて偽ゆゆ正直実義といふゆ。兎の毛で刺さ行ゆゆ。某ゆくゝとのうの紙。欺詐ゝゝゆのゆりゆゆの集會を幸ひよ。利害を説て佞人ゆゆ。解を弭させんとゆひるふ。かゝてゆゆ紙失ふよ他ゆゆ。偽りのゆゆゆゆとあり。先生ゆれを怖ゆふゆふゆゆゆゆゆゆ居るゆゆ門を漬して。ゆゆの集會を止め

ぬくるゆゑ。おのれ仇を卑怯と噂つくどくいはばけば。希二郎をを嘗め、
ど。呵々とうち笑ひ。あんまいまど後行ぶ足ふねば。欺詐の旅詐する所以を
ちらば。僕さのふ抵牌を出して。今日欺詐のつれそめを。と写世を人実るすく
まそ。まて又を門を嬢して他行と写を。是則欺詐の尽く初まるぞや。
りさのふ頼せずく。今日人を集金るのび浅どる所欺詐しとも。さのふ
いひ所実るのとるのるかくて忘語つれといへべらば。さを早牧より。門を
嬢して他行とエフろ。室を隠を居がどれは。亦是他行の旅詐こいらでう
あん身を思べさと。執鬼ばしよ爰赤兵衛は。嬢うねてあぐり。現あれば
辺へ言ふさく。欺詐つれるればさもあるぞ。癇いろみ若曹欲する所狂人
小斉。巧言令色ずさを仁といふ。欺詐は乱離の本あして。國君欺詐をつく
とれは臣妾偽り。民役ひど士庶人欺詐をつくれは。親族離を。朋友

助けど。むし管叔の流言つくや。成王をを実言とて。周公を危からしめ。
又彼褒姒が巧言つくや。幽王をを欺びて。周室遂よ傾さぬ。欺詐の名教
よ害ある。棚へ。捜てゆべらば。詭譎譏詐の邪ゆるものぞ。
巧言浮詐は。詐りの。佞るものぞ。鄭の子産といふ賢人よ。生魚一尾饋
ものあり。子産校人よ分付て。を池よ畜へといへがうけもりぬと。怒つ。
濃汁ふしを竊ふ食ふ。さを子産よ稟をまう。仰よ。さび件の魚を池へ
放せーうば。圉こ写をてまづ沈を洋く写と浮あぐり。悠然をーく
忽地よ。深底へ入りてゆと。老実る身で告しーうば。子産へをを信ずて。その
所を得るる哉。その所を得ずうと。滅達之上よりこぐる。校人退出て
冷笑ひ。誰ら子産を智者くといふやら。れ既よ彼魚を。烹て食ひーをちらぼ。
その所を得るうとを。可笑くと狭せーとぞ。その方をりてをれが。君子といくども

欺詐の譬
三人市ヨ虎と為るところ

欺く法。況て闇君。凡人庸愚。耳を信じて虚実をもとゞ。奇を好むの流れ易く利をおもふの隔さらる。魏の龐恭といふ人。あるとき魏王に稟をもつて。今人ありて告げまうさば。市中に虎ありといふ。これを信とするやいなや。王笑てうち笑ひ。虎は千里の藪なれば。栖めど。それを信とするの理いなを二人来て是をまうさば。王信じぬべし。されば信とはいへども二人まで来て如此いふ。寡人も些疑ふべし。三人来りて告げまうさば。疑なく信とせんと答ら是一つのもの。夫市に虎はなけれど。三人いへば信とせ。傷りの是はべ。さてのめは笑消し。二度は疑ひ。三度ふもうべその欺詐を遂に信とするぞし。されば孔子の一番弟子。曾参。鄙の国に曾参と云。又その国に曾参と云名字同じ人ありしに。その人を殺せうべ。ある人曾子の母に告て曾参人を殺せと。いへども母は信とせず。此方の息子は孝行の人なれど殺せとは。

とはいへど。と笑ひ。つ布を織れ。足はりもせずとある程に。又一人走り来て。曾参人を殺せと告ぐ。その時母は耳をひそめて半は疑ひ半は信じ。とさるほどに。又一人走り来て。婆さま。あらぢの曾参が人を殺して。家の毒や。といひも果ぬに母親は周章狼狽へて杼を投捨てゞ走り出でぬる。曾子の母の賢なるをもて。三度の欺詐は信とせず。一犬形に吼るとは郡犬は声に吼ゆ。人の欺詐はつゞ欺詐とはいふなり。つゞ人とて。信ずれはその可を知らず。車に輒転ずれば「ど」と聖人は宣ひき。将君子は詐を遂ず。又信ぜざるを以て億ず。人信寡ければ。その言遂ひ行はれず。漢の耳を掻かぢり。便佞利口の舌を掻き。つゞ言ふもさぐり。一生涯はなるのくと。席薦を敲て説諭せば。爺二郎頭をうち掉て。置きいの。蒸鰈鰈の背に目乃ちなし。親を貶し報ひなく。ゆめといふを連声あく。ひゝめといふとは不孝

の子共を懲さふ為の古俗の欺詐虚誇でなけまバ世ハ成立ぬれど。商人の虚誓文も。妻子眷属を難さふ為。品類ハ人々けだし。買うたやく損じやうと。いふてハ買人がなるいもなるよ。さぞく粘で固めさ物を。得要むたと偽るも。こゝろ邪直との相違あく。安うらふ又ハ高いハいとゝもまさ一文をこゝ。百損とるも買人の好こ。詔そといふとも罪ハなるべ。さぐく世界の人情ハ偽りを飾ぶこ。移ていづれいもの。傾城狂ひもろりのあん。十人の客十人なのぐら。女房やそく惚やく。といふと妄言とハもろなぐ。詔さ私ハ本ぞ。詔さろくがおり。誘いりのあまバ。そ。外とも家とも高く。なれされバとて傾城も。欺詐だろつくりのあハあじ。誘の中ハも真あり。さの中ハ誘あると。陰陽といひ。虚実といひ。非妹といひ。ゆ管といふ。陰陽虚実ゝ自然の道理。水ハ火を滅さりのなれど。水氣ハよりて火氣を倍さ。雷電を

見てこれとなれ。又火を以て水気をうく。井戸堀りのもるとこ。もるれバ実へも技葉と附。頗虚誇を加味さまバ。世倍の耳ハ入る故ハ。故ハも口碑ハ残るなり。孫子ハ兵ハ詭道といふ。詭ハ詐と欺こ。又違こ異こ。敵と戦ひ城と落さも。欺詐を上手ふつくりのハ必勝ぞといふとゆ。漢の孔明。南朝の楠なりど。武士臣とて。物ありげハ参まども。その軍もるを。ゆけバ。こゝ詭の計。詔さふ歌ゆといふりのこ。されバ又物の本。史傳記録ハ虚文妄く。左氏伝国語。史記漢書。比校て見まバ異同あり。舊事紀ハ古代の塞りの。今写本ハ。日本後紀ハ書名の詔。小説野乗ハ至てハいハぞともれさ虚誇なりまど。

こゝろ記古ハ々奔諸紀。山海経も安誕ら。英雄人と欺けバ。呂不韋が虚誇ハ呂覧のぞく。斬暁が誇ハ呉越春秋。こまらハ通さ秦漢物。于宝淵明が搜神記。段成式が酉陽雑俎。庫ら虚誇ハ流行とて。ひらさいくを

假名物語竹取ものがたりなどハ万葉の歌より虚誕をつたひろげ。美福門院を誘てハ。玉藻前と謂とつく。源氏狭衣物語下ハ。捨ていハきぬうそつれの。葉とて世の人弥重ねて虚誕でも昔のものをバ咎めぜ。今つくうそといとうう。ものもるうそ物語ね。且く古書の虚文をいぶ。むゝ唐山堯の時。日輪その数十ヲ出さり。その熱きこと大暑中ふ。煎餅を焼く類ひよあらぶ。万物焦き焼しらバ。帝堯弓よ箭うち刻ひ。戸端から射ものくべ。九ッの日輪ハ忽地墮て跡なく滅残る一ッの日輪のみ。朝よ出て夕よ没るとハ。宛ものもるの大万ハ夫人の弓勢ハ百歩の外よ及びがたし。天の高さハ九万里と。大約ふも推しつもるふ。堯ハ聖人なれバとく。九万里先の日輪を。射て落されふ筈ハ。或ハ羿が射さとものいふ。いづれもあゝても勘定あハぜ。加以日ハ火こり。一把の薪を燃して。強弓の人を射るとも。振くその火が射滅さるべきや。天の火ハ地の火よ似ぜ。こを射んといふく難し。或ハいふ九ッの日輪ハ烏の妖精。真乃日輪ものそハ。只徳とものそこを滅さその。蟇目鳴絃をなめりどいふ。大虚誕。彼九ッの日ハ質物なるべ。萬物ハ焼燋されぜ。業で燃ものを鬼火よ。草木少許も焼ざるぜく。この理ふ由て推とれハ。熱といふも又虚文こ。こを真の火よもるとれハ。火と水とその性ものを。火を射て猶て滅をとあらバ。又水を射て落さん欲。堯の時よ水逆流して。民その害を蒙りたるふ。帝堯のぜて弓箭とものて。水を退けのハざるこ。水ハ窪よ射べからぶ。或ハいふ日ハ元こ。聖王万物を憐むと。凡常よあらぶれバ。その箭ハ天よ及ばねども。精誠とぶて九ッの日輪を消ものふといふ。夫聖人の精誠をもりて九ッの日を滅をとあらべ。洪水をも又精誠とものて。忽地退けものへべきよ。その子孫日を滅よ。仰ものへざるハいふぞや。又禹の水を治るふ。七年ものて功を終ぜ。堯も禹もこゝみ聖人こ。天ハ

遠く地は近し。されども遠き天火を滅せども。近き地水を退け給ひぬ。聖人の
德も又如此ぞなれば所あり。その作給ひて為ぐさの。これらはあまつふ聖人乃
德の高きをいうんとて。却実を失へる。忍性博士が拙き虚誇に。或はいふ周乃
武王殷紂を討んとて。孟津を渡りぬ。風波猛ふ吹荒きて。王舩反覆らんと
せしに。武王左手ふ白旄を執。右手ふは黄鉞操て。目を瞋らし麾き。
余今天が下ふあり。誰か吾が意を害ふべきと。とぶらりぬ。忽地ふ風波収り
きとりぬ。こは虚誇に。夫風は天地の気に。風を天地の號令とせ。武王は聖人
紂王は悪人。聖人ぞ。ぞ。残獨の紂王を討亡して。民の塗炭を救ひぬふ。
天ぞ悪人の紂を助けて聖人の王舩をぞ覆らんとは。ぞ。ぞ。
武王風を憎て。目を睜て罵りぬ。風の神ぞ怒るべきふ。只一言ふ
こめふれ。ぞ。ぞ。果しるもぞ。ぞ。ぞ。

おびかされよ。武王一身の力をよせて。吭を腫しぬふとも。その声
天までとどくべきや。風雨ふ乗じぬべからぬ。厄難は人の賢不肖ふよらぬ。文王は
美里ふ囚はれ。孔子は陳蔡ふ糧を絶ぬれども。罵て脱きぬふ。啼く
児を叱ぶべからず。泣。蹄馬を鞭でぶべからず。跛る。相罵て好文を。辞を安寧ふ。
民を安ずるとは曲禮の發端なるふ。武王の廣言聖人ふ似ぜ。その妄語なるを
推てもるべし。日本武尊の夷僚を征伐しぬふとき。上総國へ渡らんとて既ふ
海水を出しぬ。暴風吹荒きて。いとも危くえぬ。が戈を操麾執さく。
天を罵ぬふとは吹えぜ。夫日本武尊の猛き。武王ふ猶ぬふ上遠。猶ふ
この君の武威をもて。風波を治めぬ。ぞ。ぞ。
ふは特しぞ。夷どもが放せし野火を。草薙の劔りて。拂ひ退ぬふ上。人作の野火
はさもありなん。聖王良將といふとりくども。武威りて天災はぞめぐに。或ぞ

魯陽々楚の縣公 楚の平王の孫司馬子期の子所謂魯陽文子 れ〻楚ハ僭王と称せ りてその孫を号るあ公と称せり

魯陽公。魯陽公或ハ魯襄公と作る韓國と合戦して。日暮るんとする程に。公戈をのべて。さし麾けば。その日反る事三舎とぞ。或ハ又平清盛安藝の宮嶋を築立さし。ろの汐満ん戌と定めさるふのいまだ果さじとて。その日の暮るんとするを恨て。扇を抗て。さし麾けば。没る日忽地返りしとぞいふも。万八虚誕の虚人精誠をのべて天に祈る。一点の私なけれバ。その精誠やくふ天に通ずるとも。あらんが。魯陽公の日を反し。清盛が日を反せハ。虚ふもあらじ。孝ふもあらじ。嗜慾の私を果さんとて。没める日を惜て。百億万遍麾けバとて。日輪いづで返るべき。且日月に分度あり。天に隨て運る事。昏夜止ることなしのに。聖人精誠をのべて祈りのぶとも。没る日の返るべきもあらじ。況て欲と戦て。教伐を恣ふ。身の利の為に宮嶋を造るなんど。世の為ふせぬ私情とのべて。天に及さんと遠からずや。或ハ又建保七年。正月廿七日の夜。将軍實朝公右大臣の拜賀とて。鶴岡八幡宮へ詣ふふ北條義時ハ劔の役とて。若ふ義時義のごとく白犬一匹走り来て。ろの傍に有と見くバ。心神俄頃に違乱せり。已に衣えぼし御劔をバ。仲業朝臣に渡さ。とりくさせ。伊賀四郎ひとりを召具し。ひそかに退き出ぬ。去程に禅師公暁。その夜実朝を抱奉りて。又仲業が首を斬る。この夜彼義時が。ハ劔の役に候ぞと。公暁に諫て。若ふ義時義のごとくなるを。公暁ハ諫て。仲業朝臣を教ふ。義時義の霊魂に成て大倉谷へ建立あり。仲業師堂なる。戌神その夜忽然と失てえぼしとぞいふも。詐謀。義時謀なるべく。頼家を。修吾寺の俗室なる。刺殺さ。形勢ハ愚管抄にもこれを記さる。かくて又実朝を失んとて公暁を欺さ。実頼家の仇人なれバ。右大臣を殺ん。実朝既に失ぬ。孫会殿と作ん。君ハ禅師の外に。あらじ。と賦ら。てぞ。よく謀らせ。その夜をこそ公暁と教て。その母疑ひを遁んとぞ。ふ謀て

葉師堂を建立し。戌神を安置し。その霊験といふべして。公暁と同後中
みへあり。と世の人よりもとなべき。詐偽を淳くして。虚文とさるべや。義時近屬
建立せし。戌神の守護よりて。必死を脱るゝとあり。八幡宮ハ正よりを源家
累代の氏神なるゆ。実朝社参しのゆ夜ハ懐大神ゆ敷し。ものよりあるべ
情が因。ゆる浮文ども敷へ立みべ。千万言ゆ尽しがたし。夫実録ゆ増言あり。
史伝ゆ綿文いと多し。董狐ゆ筆ねべその時ゆ。佞媚なね記者稀なるゆ。
悉く虚文を咎めべ。書ゆ記みへ者ゆ戯言あり。二三
子偃之言ハ是也。前ゆ言しハ戯之耳。と孔子の作らまし。又その聖
人病ゆ中ゆ。家臣ひそりもあゝざれば。子路気の毒ゆ思ひつ。門人
をして家臣と。しまべ病ひの間あるとゝゆ。久しゆ中ゆ嗚呼由
が詐を行ふとよ。これゆ家臣なる者ゆ作せしを。と作せしを。子路ハ

孔門十哲の賢人なれど欺詐をつく。凡人いづくゝ欺詐つくざらん頃日ゆ
この國の親ゆ。ち欺詐と言ふ。子どもらゆ教ゆとて。ゆ分が不理屈ゆ
ゆ。それハ大きゆ子筒ちゆ。賢ふ者ハ教ゆゆべ。暮蘭の夢乃春
生ふ。その秋大乳あるべき年ハ。おのづゆ低く達ゆ。草木元来非情
なり。豆ゆ教てゆるゆ。鳩ふ三枝の礼あるも。烏ゆ反哺の孝あるも。
象が親をとゝひゆ。蟹ゆ人の口まい似ゆ。その性ゆ
教ふゆ。子習ゆ学問ゆ。三絃賀人刺繍ゆ。朝ゆ晩ゆ息勢
強ても。耳ハ義抜大不器用忘ゆ。といいと早く。おぼえゆ。世間の童男
童女の庸なるゆ。欺詐ついて咬ゆ。子も又欺詐つ。
なるとゆハ枚子定規。甚麽ゆ。ものでハあるまゆ。と罵つけらまゆ
義太兵衛ハ。ものゆも大息つ。現ゆ紫ハ朱を奪ひ。鄭声ハ雅乐を

九つの日を
いちどに
かくの
王さま

八つかる日を
十枝さく
日かの
大せう

乱る。利口の邪家を覆さとは。真よりは辺のみるべし。性は善みく
情は慾あり。生るゝらよく理義を。まるものは聖人のこと。凡夫はそゝて
教はなれ。彼暑蕷蔓の風をまつとその年低く這はゝゝられは。暑蕷の
性のまつるゝらば。気候はよつる自然の理なゝば南枝花ひら開き。
合歓木の背まゝひ。鴻雁の北は赴き。玄鳥の南はるゝ。皆天の
気候は隨ふ。鳥の反哺も。鳩の三枝も。餘は準てまつ易し。夫万物は天地
を父母とゝ。かくは天地の気候はまゝて万物元はゝるとまゝ。子の賢不肖も
みな親の教はるゝ。孟子の母は。可惜機糸絶まゝ。天地不順
なれば五穀登らゝ。草木も枯槁し。親の教育はあしければ。子孫不孝ゝて
その家亡らゝ。ゝも又自然の理なり。虚実を始ゝ論せば辺
寓言と邪説をまゝ。呂管古書の錯誤を挙てつゝ田へ水を引く。はや

石りて玉と偽る。鹿を指て馬といふとも。識者はそれをまるゝゝ。又は子の
為はかくし。子は父の為は隠ゝ。かくゝと不欺所ふ似て。直きはその中はあり。
兄弟牆は鬩ども。外の侮は禦ぐ。ゝれは非をかゝるふ似れども。骨肉は
信その中はあり。孔子の戯言は門弟子を。勸ふ為の信はゝて子路は詐りを
師をおりは。ゝも信の篤きゝ。ゝは下は老子の虚無。仏氏の方便。荘
子の寓言。孫子の武略。淳于髡は。滑稽は至るまで。実ゝら出ゝ虚なれば。
味はふく世は益あり。夫兵は凶器なり。戦は殺と良将とゝ。孫子は
詭の計は人を傷らしとの信なり。老子の説は世為とゝ。詳微妙
なれは覚はく。りゝ是を識とゝは。天窓の蜂を拂はは是る。荘子の
寓言変化は意ゝ。譬喩その実を失へども。よく読りは道はゝ。淳于
髡は滑稽はいひふくれとはいふてのける。説諫なれど解易し。譬ていはゝで

五月の頃童子の青梅をかぢりありて。その母禁んとするに沙も捨ず。これ不圖えしと途にひろひ。おのが隣家のひと息子常に青梅を嗜しかば。俄に腹痛してむなしくなりぬ。けふは七日の逮夜なれば。墓參りなし来るに。こゝにも又青梅を嗜む童のありけるぞ。とそれとはなしにいひ示し童子見ぐるしが顔をうちまもりて。甚にめでる梅を捨ざるものは稀なりしを仏の方便とも。又淳于髡が滑稽者とも。孫子が武略。荘周が寓言ともいふぞかし。わづかに梅を捨させんとて子どもよその梅俺に見し。その代に銭やるといふて賺して取あげて銭と易よれば利となりて導くなれば其の子に害あり。又銭をとらせねば欺くを教るぞ。さて亦世の書籍どもにみなれとさへ記ある世は偽写の増言もあれば勧懲の為にとて近て虚をとるもの博く益とるよしを。仁の端とは聖もいへるぞや。銭遁をされども虚をなさど。地獄変

相の說なれど。現あるべしとも見えねど疑はざれば成仏せし。ためしにその國人は。胸中一点の信なく。人を欺きて身の利を謀り。讒言邪説をなすとて。口才浮薄奸智に長。古書の疑しきを穿鑿して。凡慮の決断に任するなれど耳塞でも備痛し。いにしへの愚は愚直なり。今の愚は詐るの狡いは愚に劣る。馬鹿など欺詐を尽ものは憎し。されば古にも僞りのなれ世なり。朴な月雄が信より來ぐましそありけん。曉まくと說破れば。益で居丈高くなり。おん身が近づきの聖人どの隠ましるを索め。怪きを好び。後世に述るもあらんが。これらは世をとひそりぞ述て他せぞ信じては古を好むなれど。いへましきと忘れて狭寓言の方便の勧善の懲悪のとおのが勝手に名はつくれど。なれを似るはこれ欺詐なり。これ聖人にあらざれば汝は汝が娯說をつけ。これはこれが欺詐をつく者。咎るに足らず。誇るに足らん。

畢竟虚名の名実のと高下をほけて生老実よ。たゞなんでえても情なや。名のよる亟必利がよるり利の為ふ名を好めば。虚名ともく名実とも以品ゝそくまを仙りのゝく。いづまを姉やら妹やらとけていはきぬ臭の先さきよい。とゝくべらいで佛む。かくいふ幕二郎そのむし。薮蔭よあり」とゝた。野狐炮をゝうたるゝして。屁のやうとと卑下せゝうば人ゝる甚ゝく珍重ゝく。盧月幕二郎 薮中ゝく。屁を放ゝうと世上の風声をゝうして名が高くなる。好む亟よ名利を獲て。さゝく生活ふなるぞと。又おん身が旅宿とする。臺野万八ゝうゝたゝとゝた。万八傳よ我らまを。ゝひの外よ人ゝもゝれ名のゝる亟利を汲ゝう。四でるけまが水も溜らぬ。業が高ゝと利も溜ゝ狂ど名とゝ吸膏茶で。吸ゝとまを。ゝうけの吹水見るやうふ。高いとこ張ゝく利もぞゝく。名利とはゝくゝさゝの。尼輪車ハ輾ゝかゝ。虚実ハ車の両輪のでゝく。生老実あまを。混沌家あゝく。良史あまを稗官ゝ。董狐あまを。羅貫あゝ。仏あれば衆生ゝ。三間張あれば水飴もあを。柳ハ翠花ハ紅のいろゝく。蓼喫ふ虫もものが好き。三寸不乱の舌をゝうて尼意地を張ゝう通ゝ。千万言を費ゝも。この國の人よ説てハ。ゝるにゝうとものゝゝゝはさとゝゝまちふ兼ゝゝるが。ゝうゝそのればいふハ兄達ゝ。この方よゝそ昔の人も。桴よゝゝの。九夷よ居ゝらゝのと述懐ハ吹えゝるふ。おん身のゝどが痩頤で。説ゝればとて喫ついゝうとゝく。菌抜もつゝく國でハ。凡生ゝ活るゝの。声あれば加ゝのゝば発ゝを。梅よ鶯。蚕屋の蝦蟇も。和歌を詠むゝゝあの人の放作。公治長よあゝぶれば。鳥獣の啼声ハ。何といふゝ吹まゝねど。日外下の日待の夜檀那さんがゝ藝なゝ猿下司の話説の尻へゝるも。虚洸でゝるけまば筋が来ぞ。春の花のめぐゝゝたゝう。造ゝ花ゝ賞翫

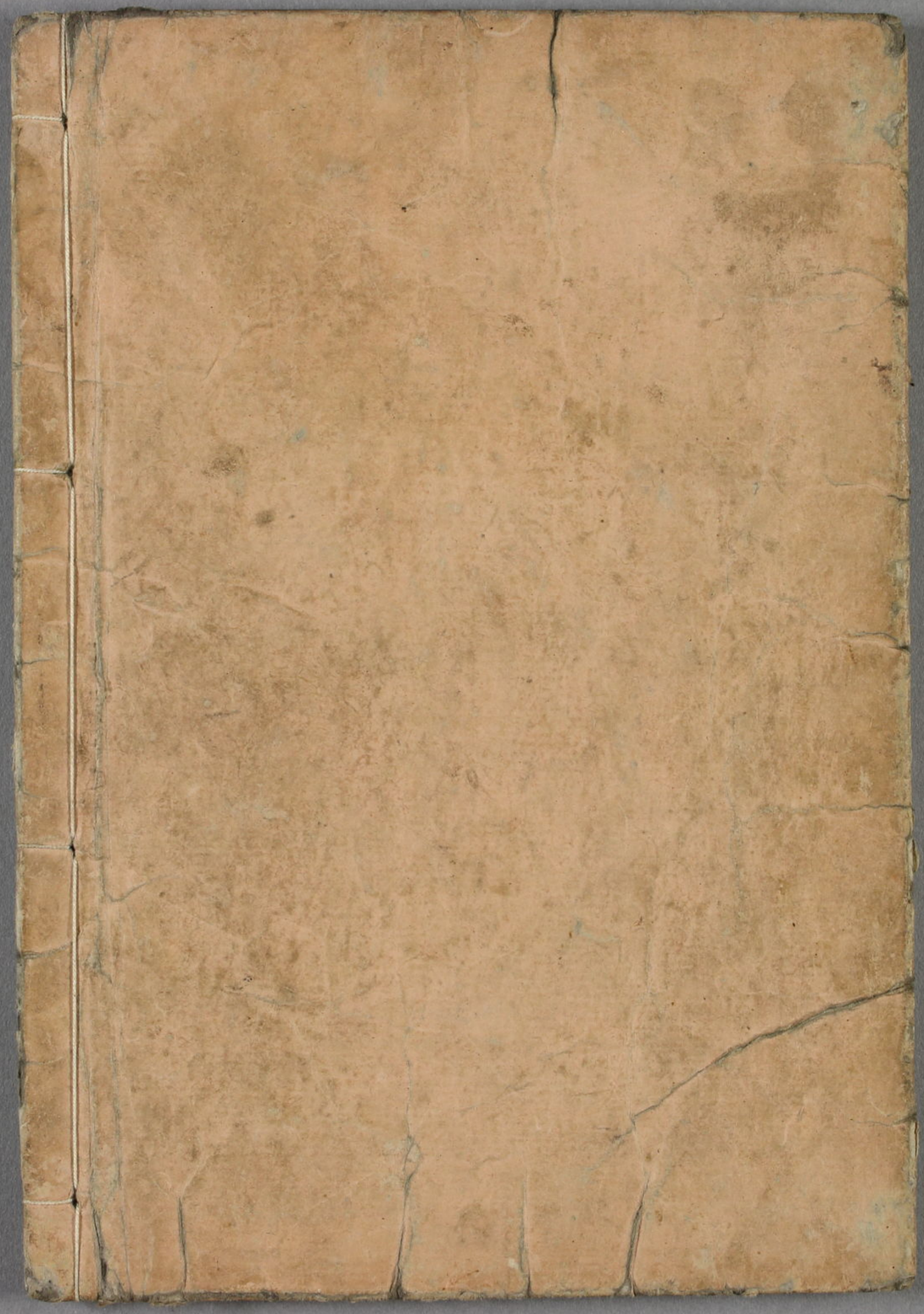
李八丈より忠ふかく上州八丈が口がたやく。鮒の昆布巻より。鯀の昆布巻が多く賣ま鰻鱺の蒲焼屋の隣にも。海鰻の糀炙賣る店あり。太夫も身揚りなる日あれば。夜蒦のむなしく過る夜は臣。真を謗の看板なく。仮て非な物を欲ぶも。とかく銭との相談すれば。よしや晦日に月は出るとも。さらで真を間尺にあはぬなし。唐山楚の國に直躬といふものあり。その父羊を竊しかば直躬これを王に謁へ。荊王すなはちその父を執て誅さんとせる。死に父に代りて死んと請ふて將に首刎られんとせるとき吏に告ていふやう。父が羊を竊ると明白に謁せしは是おのが信ならずや。父に代りて死んと請ふ亦孝行にあらずや。信ありて孝あるものを。誅しなばや。といひしかば荊王理りありとして終に直躬を赦しける。魯國の先聖これを咲て。異なる直躬が強て信といさをを二ッその父の名をとりて。

おのが名を取るものなりとぞ。眉うち顰めらましとぞかくては信なりとはいふなぞ。或は尾生が女子に契ありて。橋梁の下に俟てござれ。居よといふさを変易ぞ。まてどもく的は来ずあらく。待ぬ夕汐が満て来ても。さし退て情なしぞや。欸詐つきになれかしとて。橋梁にあがきつれ。どうく水にながれてあって死では。馬麻正直とて笑はれ。或は魯の荘公が。母公の姜氏と恨しとあり。黄泉ならでは見えじと誓ひしと。ちと後悔し。潁考叔が教にまかして。地を掘らせて穴の中にて。親子ふたたび對面ありしも。舌を二枚つかふと忍へ。眉をしをから。穴をのりと致される。諸ろの物毎に臨機変信がよくはなかれども。あまり信に実が入ると。瞽家の一心猥されて。かなんざしく後悔し。ならぬ免

たくしゝ信うら。親い友と中しらぶひ。人を恨るものもあり。されば歌みも。偽アのある世なりう。神祇を用。貧乏神ハ牙をもたるもど。今から欺詐の駄計いうして。世ゝの誓古を励をゆくとそうてもつゝね返答よ。爰ゑ兵衛ハきゝく果ま。叔孫武叔を仲尼を毀アま。嬖人臧倉。孟子を諫る。いうさまかゝ馬庶りのよ。係りあハ大きゝ損なり。つられ今ひうの直きよ因んぐ。衆の枉まるりの。ま。碓さんとそれど正直りのと。馬庶よつける某剃ハ色。比丘尼の髢挿索んう。宿うえせん。とありひうゝく。その侵外面へきり生。天を瞻てさ招けバ。紙老婆忽拉とまひさぐり。爰ゑ兵衛をうれ系せく。まゝ空中へひゆめれ登う。何国とゝるく。花ど行く。

○總評

評小云。邪説の人を傷る。その害扉狼より甚し。されども。君子ゝ義よさゝ礼。ゆゑよ害ハ吉なく。小人ゝ利うさゝ礼。ゆゑよ害あり。人世才う逞しれをえまバ。これを稱しく経済家ゝう。亦彼浮落の人を是ゝ。ゝを稱して磊落とゝう。経済世才と混ぞべうバ。り磊落と稱ぢんものハ。老荘方外の徒を仆ゝくべし。これ夫世才ゝ長たふをえれ和。経邦済世の才よ似ぞ。これ彼浮落の人をえるハ。磊落出塵の叟よ異う。理義ようること容易からぞ。人を紛ゝと難くもあるう形。世よ荘子の一書を読てその荒唐をうゝぶりのハ。荘子を紛ふりのゝ

あらず。荘子の所謂磊落の人。世よりつゝ磊落の人あれば。

夢想兵衛胡蝶物語後編巻之一畢